

自己評価書
(平成28年度)

平成29年3月

鳴門教育大学附属特別支援学校

I 学校の現況及び目的

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属特別支援学校
- (2) 所在地 徳島市上吉野町2丁目1番地
- (3) 学級等の構成
小学部 3学級(複式)
中学部 3学級
高等部 3学級
- (4) 児童生徒数及び教員数(平成28年5月1日)
小学部18人, 中学部17人, 高等部24人
児童生徒数59人
教員数27人(正規教員数)

2 目的

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属特別支援学校校則第1条において「知的障害及び自閉症の児童生徒に対して、小学校、中学校及び高等学校に準ずる教育を施し、あわせて障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける」と定めるとともに、同条第2項では「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の要請に応じて、幼児、児童又は生徒の教育に関し必要な助言又は援助を行うよう努める」と定めている。

また、校則第1条には「鳴門教育大学(以下「本学」という。)における児童及び生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする。」と定めており、具体的には教員養成大学の附属特別支援学校として、次のような使命をもった学校でもある。

- ①大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ②地域の教育課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教育委員会・市町村教育委員会等からの要請による教員派遣など、教育界の発展に寄与する使命
- ③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命
- ④附属学校としての実践的研究の成果を活か

し、地域における特別支援教育のセンターとしての役割を発揮する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている目的の達成のため、学校として、また各学部としてそれぞれ次のような教育目標を掲げている。

- ①明るい性格と豊かな人間性を育てる。
- ②日常生活に必要な習慣や態度を養う。
- ③生活を高めるため、知識・技能・態度を育てる。
- ④強靱なからだと意志を養う。
- ⑤集団生活への適応能力を育てる。

(小学部)

- ①豊かな心、じょうぶな身体を育てる。
- ②日常の基本的な生活習慣を身につける。
- ③興味関心を広げ、自ら取り組む態度を育てる。
- ④人とかかわる基礎的な力を育て、集団での活動に参加できる態度を育てる。

(中学部)

- ①身体の健康及び思春期の不安定さに配慮しつつ、生徒自身が心理的に安定した状態で安全な生活を送る。
- ②自分や他者にとってよりよい結果を得るために、行動する。
- ③認知・学習、運動・体力のそれぞれの知識や技能の向上を図るとともに、場面や状況に合わせた態度の育成を図る。
- ④個々の「参加」の質を高めるために、学習で身につけた知識・技能・態度を実際の家庭生活・地域生活・労働生活に発揮する。

(高等部)

- ④個々の「参加」の質を高めるために、学習で身につけた知識・技能・態度を実際の家庭生活・地域生活・労働生活に発揮する。

(高等部)

自立した社会生活に必要な知識や技能を習得し、家庭生活や職業生活の中での実践力を身につける。

- ①心理的な安定を図るとともに、働くための健康な身体と青年期の豊かな心情を育てる。
- ②主体的に働く意欲や態度、集中力を養う。
- ③将来の社会生活に必要な言語・数量に関する基礎的学力および生活技能を養う。
- ④人と関わる中で社会性を身につけ、自ら生

活を楽しむことができる力を養う。本校では、学校及び各学部の教育目標に基づき、それぞれ次のように「めざす子ども像」を明確に示している。

○明るく、仲よくできる子ども

○じょうぶで、元気な子ども

○よく働く子ども

○力いっぱいがんばる子ども

(小学部)

○心と身体の健康向上に取り組むことができる児童

○身の回りのことが、必要な支援を得てできる児童

○学習活動に興味を持ち、意欲的に取り組むことができる児童

○人とかかわりを大切にし、集団活動に進んで参加することができる児童

(中学部)

○健康な身体と健全な心を持つ生徒

○周りの人に自分から意思を伝え、係わりあえる生徒

○学びや体験をとおして「分かる」「できる」「こうすればいい」ことを自分から見つけられる生徒

○自らの興味や関心、楽しみを広げ、様々な生活場面に参加できる生徒

(高等部)

○身体と心の健康に気をつけて、人や自然を愛することができる生徒

○進んで働こうとする意欲やチャレンジ精神を持つことができる生徒

○自分でできることは自分でして、できないところは支援を求めることができる生徒

○マナーやルールを守って積極的に社会参加をしようとする生徒

平成28年度 重点課題

① 個々の児童生徒の実態とクラスの集団化を見据えた学級経営を図る。

② 教育相談、ICT教育機器の活用、継続的な相談支援の実践をとおし、個々の教員の資質の向上を図る。

③ 地域のニーズに即した特別支援教育のセンター的役割を果たすため、相談支援に対応できる学部体制の構築を図る。

④ 知的障害特別支援学校として、個々の児童生徒の合理的な配慮と基礎的環境整備の関連を図る。

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	小学部
重点課題	個々の児童の実態とクラスの集団化を見据えた学級経営を図る。
重点目標	これまでの研究成果を踏まえた生活単元学習の研究授業を行い、学級の集団化を見据えた授業力の向上を図る。

目標についての 具体的な評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 昨年度までの研究成果を共通理解し、年間計画の見直しと改善を進めるための定期的な話し合いを年間5回以上行い、随時共通理解を図る。 2 昨年度までの生活単元学習の見直しを行い、本年度の計画を改善する。 3 集団化に重点を置いた授業展開及び授業力向上について、年度末に教員対象のアンケートを行い、7割以上の教員が授業力向上の成果を得る。
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<ol style="list-style-type: none"> 1 目標達成のために定期的な学部研究会（年間5回以上）の実施。 2 7月、12月に授業研究会の実施。 3 年度末に教員対象に成果に関するアンケートを実施。

実施状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 学部研究会を学部の後や木曜日などに設け、年間6回以上実施した。 2 7月8日、11月25日に研究部企画の下、授業研究会を実施した。 3 年度末に教員対象に4件法及び記述でのアンケートを実施した。 			
評価指標の達成度 及び成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 生活単元学習の年間計画を昨年度と比較検討し、本年度の計画の見直しを行った。内容の精選、各クラスの系統生などを踏まえ、単元計画を作成することができた。その際「遊び」の要素やPDCAサイクル等、昨年度に本学八幡名誉教授から助言いただいた「指導のポイント」を全教員で共通理解し、各学級で実施できた。 2 授業研究会の事前に授業内容について話し合いを行うことで、共通理解を図り、授業の取り組みや担任の考え方を知ることができた。 3 年度末に教員対象に4件法及び記述式でのアンケートを実施し、8割以上の教員から「集団化を図ることができた」という肯定的な評価を得ることができた。 <p>研究に関して、不明な点を全員で共通理解するように心がけることで、率直な意見が生まれ、議論を深めることができた。</p>			
総合評価 (○で囲む)	(A)	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究会での議事録より。 ・小学部教員へのアンケート結果より。 			
次年度の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いに授業参観をし、生活単元学習の授業づくりを深め、中学部との系統生を見直す。 ・個々の中心的課題を見直し、その課題の解決を目指す。 ・現実度の高まるような単元設定や授業展開を検討する。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	小学部			
重点課題	知的障害特別支援学校として、個々の児童生徒の合理的な配慮と基礎的環境整備の関連を図る。			
重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 本校児童の実態把握に関して、保護者との共通理解を図り、問題について認識を共にする。 2 鴨島病院の専門家の指導を積極的に取り入れ、児童の実態把握を深め授業改善につなげる。 3 医療機関や福祉機関と連携を図りお互いの情報を共有しながら、児童の支援につなげる。 			
目標についての達成の具体的な評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 児童送迎時の保護者との情報交換や年間2回以上の懇談、登校時の教室参観等を行い、児童の合理的配慮と教室の環境整備を図る。 2 鴨島病院専門家の授業参観、及び放課後の話し合いを通じて、児童の実態把握を深める。 3 保護者との懇談や登校時の情報交換から、必要に応じて関連機関との連携を図る。 4 保護者へアンケートを実施し、学校教育に関して「よかった」という評価を7割以上の保護者から得る。 			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<ol style="list-style-type: none"> 1 児童登校時に教室まで保護者の付き添いを実施する。 2 鴨島病院専門家の授業参観を年間数回実施する。 3 医療機関への付き添いや福祉機関との懇談を必要に応じて行う。 4 保護者へアンケートを実施する。 			
実施状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 ほとんどの保護者が、登校時に教室まで児童の付き添いを行った。 2 鴨島病院専門家の授業参観を年間8回実施した。 3 医療機関への付き添いや福祉機関との懇談を、児童の実情や家庭からの要望に応じて合計10回以上行った。 4 学校評価の保護者アンケートの集計結果を用いた。 			
評価指標の達成度及び成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 登校時、保護者に、子どもの教室での様子を参観してもらいながら、担任と情報交換の時間を持つことができ、情報を共有することができた。 2 鴨島病院専門家からの指導・助言を授業や個々の支援に生かすことができた。 3 数名の児童は、新たに医療機関との連携をスタートすることができた。連携前に気がかりとなっていた行動の改善がみられはじめた児童もいる。 4 1～3に関する内容に関して保護者から約95%の満足度を得ることができた。 			
総合評価 (○で囲む)	(A)	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・登校時の保護者と担任の様子。 ・鴨島病院専門家の指導・助言の情報共有。 			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との確かな信頼関係のもと、家庭教育と学校教育との連携を進める。 ・医療・福祉との連携を継続し、切れ目のない支援体制を構築する。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	中学部			
重点課題	個々の児童生徒の実態とクラスの集団化を見据えた学級経営を図る。			
重点目標	キャリア教育的（社会的・職業的自立を目指す）視点に立ち、一人ひとりの生徒が主体的な学習活動に取り組むとともに、能力格差に関係なく全ての学年集団が（学び）協同する生活単元学習の学習内容や教員が支援者（教示的な指導を最小限にする）として必要な役割要素を明らかにする。			
目標についての具体的な評価指標	各学年で行う生活単元学習の授業実践と教員間の協議によって、生徒の主体性並びに特性に対応した全ての生徒の協同的活動を促すための授業を年間2回実施し、授業づくりの要素を2点以上導き出す。			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	5月：研究計画を立案する。 6・7月：第1回研究授業及び授業研究会を開催する。 6～10月：中学部教員による協議を行う。 11月～：第2回研究授業及び授業研究会を開催する。 12月：中学部教員による協議を行い、要素2点以上を導き出す。 2月：公開授業研究会並びに中学部アンケートや実践紹介時における参加者との意見交換により、妥当性評価を行う。			
実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ・12月までは計画通りに実施できた。 ・「学校・家庭・地域での生活における様子について」の保護者アンケートを7月と12月に実施し、将来の望ましい姿から（保護者が考える）生徒の社会的な自立、学級・学部経営に対する真摯な保護者の考え（評価）を知ることができた。 ・「公開授業研究会中学部実践発表」の場で、県内外の参加者と情報交換や取り組みについての賞賛の言葉をいただいた。 			
評価指標の達成度及び成果	①各学年における生活単元学習のねらいを系統的に考え、年間計画における単元や学習内容を精選し、教員間で共通理解を図ることにより、生活単元学習における学級間の系統性と学習効果を上げることができた。 ②授業において生徒の主体性を発揮させるためには、環境設定をし、教員の言葉かけによる教示率を下げると共に適切な手助けを適切な場面において実施し、生徒同士の関わりを活発にすることが大切である。 ③中学部段階において、学び・協同（集団化）を高めるためには授業において教員や生徒が目的（目標やねらい）意識を持てる（自覚できる）ように、主体性に力点を置いた授業と集団化に力点を置いた授業を繰り返し実施する事が大切であり、それによって生徒は次に何をすべきかについてしたらよいのか自信を持ち見通しを持って取り組むことができた（ユニットの考え方） など、「授業づくりの要素」を導き出すことができた。			
総合評価 (記号を○で囲む)	○A	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に対するアンケート結果において家庭における汎化が見られた。 ・学校評価における中学部学級及び学部経営に対する評価項目で「良い」評価が80%以上だった。 			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートを継続して実施する。 ・来年度も研究を継続し、年度当初から学級経営や学習指導において「授業づくりの要素」を取り入れることで、効果的な実践を深めて行きたい。特に「進路」「集団化（集団での学習）」の観点を意識して、保護者への説明を行うことで、実践内容の周知を図りたい。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	中学部			
重点課題	知的障害特別支援学校として、個々の児童生徒の合理的な配慮と基礎的環境整備の関連を図る。			
重点目標	多様化した障害の状態や発達段階及び程度に応じて、また生徒の発達段階と実態及び生活年齢に応じて、保護者との連携のもとにクラス等の集団における合理的な配慮と基礎的な環境整備を図る。			
目標についての具体的な評価指標	<p>生徒全員に年間1回以上の障害の特性把握のためのアセスメントを行い、実態に応じてそれぞれの生徒に合理的な配慮を行うためのケース会議を年間2回実施する。</p> <p>年間10回以上「学部だより」を発行する。その他毎日の連絡帳での情報交換。「学級だより」を随時配布する等、保護者との信頼関係を形成し、連携強化を図る。</p> <p>・以上を通して学校評価アンケート（保護者用）の1,2,4,9,11,14,15,18の項目において「良い（あてはまる）」の評価が80%以上ある。</p>			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<ul style="list-style-type: none"> ・年間10回以上の「学部だより」の発行。 ・4月 9月 2月：保護者と個人懇談。教育的ニーズの聞き取り実施。 ・学部懇談や学級懇談を年間に3回。その他に家庭訪問を行う。 ・「学級だより」の発行。 ・連絡帳での情報交換。必要に応じて、電話等によるより直接的な連絡 ※今年度は修学旅行の実施年であるため、連携強化を特に図りたい。 			
実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ・平成29年2月現在、12回の「学部だより」発行。 ・4月 9月：保護者と個人懇談。教育的ニーズの聞き取り実施。2月予定 ・学部懇談や学級懇談を年間に3回。その他に家庭訪問を行った。 ・各学級、毎月「学級だより」を発行。その他連絡帳での情報交換。必要に応じて電話等によるより直接的な連絡により、対応を行った。 ・学校評価アンケート（保護者用）を実施した。 			
評価指標の達成度及び成果	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒全員に「新版 S-M 社会生活能力検査」と「太田ステージ評価」、必要に応じて「WISC-IV 知能検査」等を実施し、生徒の実態把握に努め、ケース会議等で共通理解を深め、指導や支援に役立てた。 ・保護者のアンケートや聞き取り等により、保護者の教育的ニーズを把握すると共に、中学部での教育について学級通信や学部だよりを通して発信することにより連携を強化でき、保護者と信頼関係を気づくことができた。 ・学校評価アンケート（保護者用）の1,2,4,9,11,14,15,18の項目において「良い（あてはまる）」の評価が80%以上あった。 			
総合評価 (記号を○で囲む)	○A	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケートにおいて、「良い（あてはまる）」の評価が全ての項目で80%以上あった。 			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、教員の約半数が（中学部）初めての教員だったため、1年間の見通しが立たないまま行事を計画することが多くなり、一部の教員に負担が集中することがあった。来年度は、そういうことにならないよう教務と協同で計画し、実施していけるように考えたい。 ・学校評価アンケートの結果を踏まえ、「集団参加」「教育支援計画と個別の指導計画」「意思疎通」の項目を意識して、十分な説明を図りたい。また「学校での生活（学習）」についても、学部懇談や学級懇談を通して説明することで保護者との意思疎通を深めたい。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	高等部
重点課題	個々の生徒の実態とクラスの集団化を見据えた教育課程に基づいた学級運営を図る。
重点目標	1 校内研究と関連性を持たせ関係機関との連携を図りながら、社会的・職業的自立を促すキャリア教育の視点に基づいた授業づくりを行う。 2 社会参加と自立に向けた高等部段階に相応しい、一人一人のライフステージを見据えた指導・支援の検討と充実を図る。

目標についての具体的な評価指標	①平成 27 年度研究結果を基に、3 回/年（各クラス 1 回）生活単元学習の研究授業を実施する。 ②外部リソース（大学教授・福祉サービス事業所職員等）との協働体制を確立し、授業改善を進める。 ③就業体験の機会を関連づけ、高等部ライフステージに妥当性の高い授業づくりについて検討する。
実施計画 (手だて・スケジュール等)	4 月：平成 27 年度の反省より高等部教育課程の検討。 5 月：研究計画の立案。 5 月～2 月： ①研究授業および授業研究会の実施。（7 月・11 月・12 月） ②就業体験の実施。（6 月・9 月） 2 月～3 月：研究成果と課題の、教員の協議による評価の実施。

実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 月～5 月本校研究と関連性をもたせ研究計画を立案した。 ・ 7 月・11 月・12 月（各クラス 1 回）生活単元学習の研究授業および授業研究会を実施した。 ・ 上記授業研究会において大谷博俊鳴門教育大学教授，就労移行支援事業所職員 3 名に協力者として参加いただいた。 ・ 6 月・9 月に就業体験を実施し，研究に関するアンケートを実施した。 ・ 1 回/月高等部研究部会を実施した。 ・ 2 月公開授業研究会の結果に基づき研究成果と課題を協議した。 			
評価指標の達成度及び成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本校研究と関連づけた研究計画を立案し，計画に則って研究授業や授業研究会および学部内で協議を図りながら授業改善を進めることができた。 ・ 外部リソース（大学教授・福祉サービス事業所職員）からの助言をを授業改善に役立てることができた。 ・ 今年度関連のあった就業体験先から授業改善に必要な情報を得ることができた。 			
総合評価 (記号を○で囲む)	(A)	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内授業研究や公開授業研究会における教員や外部リソースからの助言及び提案事項を踏まえる。 ・ キャリア教育の視点から捉えた教科等の学習における指導の枠組みや授業改善のためのツールを考案・活用した授業改善の進捗状況。 ・ 上記を検討して高等部教員全員で協議を実施した。 			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度の実践を継承した，外部リソースを活用した研究授業及び授業研究会の実施。 ・ 授業の具体的な評価と改善ならびに教育課程の検討。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	高等部
重点課題	教育相談，ICT 教育機器の活用，継続的な相談支援の実践をとおり，個々の教員の資質の向上を図る。
重点目標	外部専門家の助言や，外部機関の先行研究をもとに，特別支援教育の今日的課題である ICT 教育の専門性を高めるために，次の2点に取り組む。 1 ICT 機器を活用した授業作りを実践し，児童生徒のキャリア発達支援（QOL 向上）をめざす。 2 ICT 教育推進に関する教員の専門性の向上を図る。

目標についての具体的な評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ① ICT 教育推進に関する説明や就学奨励費補助対象限度額拡大による保護者への ICT 機器購入の依頼を計画的に行う。 ② ICT 教育に関する学部コンセプト（目的・方法）や利用規程を5月までに作成する。 ③ ICT 教育を全ての教科等の教育課程上に位置づけて実施する。 ・「個別の指導計画」の手立てとして10%以上明記する。 ④ ICT 教育をテーマにした授業づくりを5回/年以上実施し，外部専門家からの助言を受けることことで ICT 教育に関する専門性を高める。
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<p>4月～5月：・高等部コンセプト及び利用規程を検討・策定する。</p> <p>6月：高等部教員の育成評価システムに ICT 教育の専門性向上をあげる。</p> <p>4月～3月：・ICT 教育推進に関する保護者への情報周知（学部懇談にて） ・外部専門家の活用 （授業作りに関する助言として四国大学前田教授3回/年 機器活用に関する助言として ICT サポーター重金氏15回/年） ・前期，後期毎に個別の指導計画の検討と評価を行う。</p> <p>2月～3月：育成評価システムの自己評価と協議による評価ならびに保護者の学校評価に基づく専門性向上と学部体制に関する総合的評価を行う。</p>

実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ・4月に，高等部 ICT 活用コンセプト及び就学奨励費補助による機器活用規定を作成した。 ・ICT 機器を活用した授業づくりを教育課程上（個別の指導計画）に位置づけた。 ・ICT 教育推進に関する保護者への周知を行った。 ・外部専門家（前田四国大学教授1回，重金 ICT サポーター8回）を活用し，専門性の向上に務めた。 ・育成評価システムの自己評価ならびに保護者の学校評価にもとづく総合的な評価を行った。 			
評価指標の達成度及び成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT 活用コンセプトならびに機器活用および運用規定に則り授業づくりを行った。 ・外部専門家を活用しながら ICT 機器活用を教育課程上に位置づけた。（指導計画の全教科における機器活用割合 8.9 %。昨年度比 4.7%向上） 			
総合評価 (記号を○で囲む)	A	○B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者による学校評価アンケート結果（学校環境項目 NO12）における肯定的な評価（79%）による。 ・育成評価システムによる教員の自己評価ならびに協議結果による。 			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT 活用コンセプトならびに機器利用規程の再検討と実施。 ・外部専門家の継続活用による専門性向上。 ・個人のキャリア発達を促す ICT 教育の検討（就学奨励費補助金による機器購入，教科等での活用等の個別化）。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	発達支援センター			
重点課題	地域のニーズに即した特別支援教育のセンター的役割を果たすため、相談支援に対応できる学部体制の構築を図る。			
重点目標	<p>地域支援部と連携し、研修協力機能（講演や研修会講師）、相談・情報提供機能（保育・教育相談）、指導・支援機能（本学井上ゼミが開催するわくわく教室サポート及び本校すぎのこ教室）の3部門を重点項目として取り組む。</p> <p>①校外の幼児児童生徒に対する相談事業を通して支援先と連携して支援体制づくりを行う。</p> <p>②発達支援センター教員が特別な支援が必要と思われる小学校低学年児童（すぎのこ教室やわくわく教室修了児）に来校相談の支援を実施し、早期支援のフォローアップと通級指導の在り方を検討する。</p> <p>③外部専門家である理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を活用し、校内児童生徒のアセスメントや指導に関する連携を行う地域支援部の実践を元に、校外支援に活用できるコンテンツ（資料やスライド等）にまとめる。平成27年度作成の「支援の手引き」を改訂して内容充実を図る。</p>			
目標についての具体的な評価指標	<p>①鳴門教育大学第3期中期目標に沿って相談支援等150件、うち15名の教員等に対しては複数回の相談を行う。</p> <p>②すぎのこ教室やわくわく教室修了児に対して10回程度の直接的指導を行う。指導内容や教材を地域支援部と共同開発する。</p> <p>③相談支援において見いだされた「からだ」の専門性に関する支援ポイントについて、外部専門家による研修等でアセスメントの方法や事例対応力を高め「支援の手引き」改訂版に盛り込む。</p>			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<p>①徳島市教育研究所、徳島市子ども施設課等に継続的な相談が必要な事案の紹介を依頼し連携を図りながら、大学附属学校として地域におけるセンター的役割を発揮する使命を持つ本校への評価を高める。</p> <p>②対象児の指導を進めながら、出てきた課題に対して対人行動や社会的コミュニケーション、言語理解等を促す指導内容や教材開発を行う。</p> <p>③多動や不注意、学習意欲の低下につながる「からだ」の要素について学び、「支援の手引き」の資料づくりをする。</p>			
実施状況	<p>1月末現在の実績を記載する。</p> <p>①相談支援数は214件、複数回相談の対象となった教員等は20名であった。</p> <p>②わくわく教室サポートを8回、わくわく教室修了児1名に来校の直接指導を19回実施</p> <p>③外部専門家が作成した支援の手引きをDVDとして15箇所配布。また研修会等で延べ150名程度に紹介</p>			
評価指標の達成度及び成果	<p>①徳島市教育研究所の要請を受けた11校を支援。徳島市子ども施設課の3回の研修（新任保育士、所長会対象）を実施。</p> <p>②わくわく教室対象幼児等への支援を元にことばの発達や社会性の指導ポイントに関するスライドを作成し、徳島市中学校区連絡会（3校区、延べ65名）の研修で伝達した。</p> <p>③昨年度に引き続き専門家による校内支援、校外への派遣を行った。</p>			
総合評価 (記号を○で囲む)	A	B	C	D
	80%以上	70~79%	50~69%	49%以下
評価根拠	1月末の段階で鳴門教育大学第3期中期目標を達成することができた。また、各校園に対する助言・支援のみでなく、市教委等への研修・相談支援を実施することで、センター的機能を質・量ともに高められたこと。			
次年度の課題	<p>・当初計画したわくわく教室修了児への教材（通常学級と連続性のある指導内容）の開発や「支援の手引き」の改訂版が未完成となったので、次年度には完成させたい。</p> <p>・インクルーシブ教育システムの多様な学びの場のひとつとしての特別支援教育と通常教育との連続性に対応するための課題について、本校教員の意識を高めていきたい。</p>			

鳴門教育大学附属特別支援学校は創立50周年を迎えました

平成28度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	研究部			
重点課題	個々の児童生徒の実態とクラスの集団化を見据えた学級経営を図る。			
重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 児童生徒の生活年齢や障害特性、発達段階などを把握して、個別の指導計画や生活単元学習の個人目標や支援方法を設定し、集団の中での個別指導を行う。 2 各学部段階での生活テーマに沿った活動の中で、他者意識や協力、役割遂行することを身につけ、人間関係や仲間づくりを図っていく。 			
目標についての具体的な評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 各クラスにて児童生徒の中心的課題を把握して、生活単元学習の個人目標を設定する。 2 生活単元学習の研究授業（児童生徒の中心的課題をふまえた集団化の授業づくり）を各学部、年2回以上実施する。 3 生活単元学習の授業づくりについて学部研究や全体授業研究会で協議を行い、個々に応じた目標や支援、集団づくりなどの授業改善を図る。 			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<p>4月～5月：研究計画・研究方針の周知、児童生徒の「中心的課題」をふまえた個別の指導計画や生活単元学習の年間指導計画を作成する。</p> <p>6月～2月：各学部、年2回以上の研究授業を実施する。また、本学特別支援教育専攻の先生から助言を受け、授業改善や学部研究に生かす。</p> <p>2月：公開授業研究会で成果を発表し、研究協力者から研究結果について助言を受ける。</p> <p>3月：本年度の成果と課題をまとめ、次年度の研究計画案を作成する。</p>			
実施状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 各クラスにて児童生徒の中心的課題を把握している。全体授業研究会、公開授業研究会等では学習指導案の中に記載した。 2 生活単元学習の研究授業（児童生徒の中心的課題をふまえた集団化の授業づくり）を各学部、年2回以上実施した。また2月の創立50周年記念公開授業研究会では全クラス公開授業を実施した。 3 学部班別研究や全体授業研究会で協議を行い、個々に応じた目標や支援、集団づくり等の共通理解を図りながら授業づくりを実施した。 			
評価指標の達成度及び成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 中心的課題について、学級担任が年度当初に把握し、指導案に記載するとともに、日々の授業づくりにおいても意識することができた。 2 各学部において学部（班別）研究を実施し、学校や学部の研究テーマを踏まえた研究授業を実施することができた。 3 年間を通して授業改善を実施することができた。 			
総合評価 (記号を○で囲む)	(A)	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	重点目標達成のための具体的指標を達成することができたため。なお、4年間の研究の3年次を終え、生活単元学習の学校研究でねらいとしている視点が、次第に校内教員に浸透してきていると考える。			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生活単元学習についての4年間の研究成果を有意義な形で公開するとともに、本校の教育課程改善の方向性を提案する。 ・平成30年度からの学校研究テーマについて、次期学習指導要領の方向性及び本校の使命に沿った研究内容の焦点化を図る。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	教務部			
重点課題	個々の児童生徒の実態とクラスの集団化を見据えた学級経営を図る。			
重点目標	1 教育実習校としての役割を担うため、教育実習の指導力向上のための授業研究会を実施し、授業の改善に努める。 2 教育実習生の「自己評価シート」の結果分析から、教育実習内容の検討を行う。			
目標についての具体的な評価指標	1 教育実習生への指導効果を高めるための授業研究会を各学部で2回以上実施し、授業の改善を図る。 2 教育実習生の「自己評価シート」結果のまとめを通じて、教育実習における必要かつ有効な実習内容や求められる指導者側の資質・専門性に関する内容についてまとめる。 3 授業研究会について、各学部での成果について部内での報告を行い、授業力向上に関する成果を得る。			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	5～9月：教育実習の授業力向上のための研究授業を各学部で計画・実施する。 10月下旬～11月：教育実習生の「自己評価シート」の結果をまとめる。 12月：教務部会で授業研究会についての報告会を設ける。			
実施状況	1 概ね計画通り実施することができた。 全体研修会：講師 川人指導教諭…7月21日 小学部①授業…生活単元学習：7月7日、19日 ②授業検討会…8月3日、8月19日 中学部①授業…美術：7月11日、日常生活：7月13日 ②授業検討会…7月19日 高等部①授業…職業科：7月20日、②授業検討会…8月3日 2 教育実習生に「自己評価シート」の提出を求め、全実習生から回答を得た。 3 2月の部会で、各学部からの報告を行った。			
評価指標の達成度及び成果	1 各学部とも、指導案の書き方、ティーム・ティーチングの在り方に関して議論を深め、実習生指導についても共通理解を図ることができた。特に、教育実習の指導の際に、単元設定についての説明の仕方や、実習生が指導案を作成する際に、単元構成や目標設定についてどのように指導・説明するのか、児童の実態の記載についてどう指導するかなど具体的に意見交換をすることができた。 2 自己評価シートの項目の数値を実習前と実習後で比較した結果、実習後の自己評価の数値が8～13点向上していた。学習指導力や児童生徒への指導力が向上したと思われる。 3 教育実習の指導に絞った具体的な研修を行うことができた。学部で取り組んだことにより、協議を深めることができた。			
総合評価 (○で囲む)	(A)	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	1 授業力向上の研修についての各学部の報告書より。 2 実習生の「自己評価シート」より。 3 各学部からの報告書より。			
次年度の課題	・各学部で教育実習の指導力向上の研修に1回以上取り組む。 ・7月に実施した全体研修会を、4月または5月に行う。			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	教務部
重点課題	知的障害特別支援学校として、個々の児童生徒の合理的な配慮と基礎的な環境整備の関連を図る。
重点目標	①個別の指導計画改訂に向けて、改善手続きに関する組織の作成。 ②個別の指導計画及び尺度表に関する保護者への調査の実施。

目標についての 具体的な評価指標	①他校の現状を調査し、個別の指導計画改訂に向けた組織を構成する。 ②保護者に対して、個別の指導計画に関するアンケートを実施し、運用に関しての状況を把握する。
実施計画 (手だて・スケジュール等)	①他校での個別の指導計画の実施状況と組織について調査を行う。 本校での個別の指導計画運営委員会（仮名）の組織作りの検討。 個別の指導計画運営委員会の組織の承認。 ②4月：個別の指導計画・尺度表運用に関する研修会を実施する。 5月～9月：アンケート実施を検討し、アンケートを作成する。 10月～12月：アンケートの実施・まとめ

実施状況	<p>実施時期やアンケート対象者の変更はあったが、概ね計画通り実施することができた。</p> <p>①県内の知的特別支援学校2校の個別の指導計画の実施の現状及び様式等について調査を行った。また、個別の指導計画運営委員会（仮名）の組織について、教務部会で検討した。</p> <p>②保護者のアンケートについては、学校評価のアンケートの項目を当てることとした。指導計画・尺度表に関して、教員対象にアンケートを実施し、1月～2月に実施し、意見の集約ができた。</p>			
評価指標の達成度 及び成果	<p>①各学校で様式が違うため比較しにくい点もあるが、目標を絞って記入している学校もあり参考にすることができた。個別の指導計画運営委員会は支援進路部、研究部、教務部の各部長、管理職で構成することに意見が集約した。</p> <p>②保護者に対しては、学校評価アンケートの個別の指導計画の内容に関する項目で95%の満足度を得ていた。教員の考えをまとめる必要があることを部会で共通理解し、教員対象のアンケートを実施した。 教員アンケート19名中「現状のままでよい」…32%、「変更した方がよい」…53%、「わからない」…16%であった。なお、改訂部分の詳細及び記述回答については、今後の検討を必要とする。</p>			
総合評価 (○で囲む)	A	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画様式の調査結果より。 ・学校評価保護者アンケート結果より。 ・学校評価職員アンケートの結果より。 			
次年度の 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画改訂案について検討をする。 ・個別の指導計画のマニュアルの見直しをする。 			

平成28度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	地域支援部			
重点課題	教育相談, ICT教育機器の活用, 継続的な相談支援の実践をとoshi, 個々の教員の資質の向上を図る。			
重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 発達支援センターと連携し, 校外の教育相談支援において, 研修会等から得た知識や成果を発揮するとともに, 発達支援センターで実施する来校型の直接的支援のサポートを通して, 実践力を高め, 専門性の向上を図る。 2 継続的な相談支援や研修において得られた知識や成果を本校職員に還元し, 個々の教員の資質向上に繋げる。 			
目標についての具体的な評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域支援部員の特別支援教育巡回相談員が県教育委員会主催の相談活動に必要な研修会に年間2回以上参加するとともに, 校外の継続的な相談支援を実施する。 2 地域支援部員が, 本校発達支援センターと連携して, 来校型の早期教育支援指導教室の支援者サポートとして, 概ね週1回関わり, 実践的研修を行う。 3 教育相談で活用した資料や課題解決のヒントなどを本校職員が共有し, 教員の資質向上を目指した研修会を年間2回実施する。 			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<ol style="list-style-type: none"> 1-① 特別支援教育相談員が県教育委員会主催の相談活動に必要な研修会に地域支援部員が参加する。 1-② 特別支援教育巡回相談員が校内の特別支援教育コーディネーターの地域の相談活動に同行したり, 支援対象の保育所(内町, 渭東, 城西, 八万東)の相談や徳島市内の幼稚園, 小・中学校の教育相談依頼に応じたりする。 2 特別支援教育相談員が, 「わくわく教室」(本学 特別支援教育専攻 井上とも子教授大学院生ゼミ 実施の指導教室)の直接的支援のサポーターとして関わり, 相談と直接指導の実践的研修を受ける。 3-① 発達支援センターと連携して, 教育相談の事例を交え, その課題解決のヒントや教材教具の開発, または活用資材を共有する校内研修会を実施する。 3-② 3-①の受講者にアンケートを実施し, 集計結果を考察し, 今後の研修に向けた改善案を作成する。 3-③ 校内リソース掲示板に, 1の経過報告及び2で学び得た知識や成果を報告する。 			
実施状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 校内の特別支援教育巡回相談員2名が, 県主催の研修会に積極的に参加するとともに, 対象保育所への電話連絡や相談, 市内の相談依頼に来校して応じた。 2 主に, 地域支援部の特別支援教育巡回相談員が来校型の早期教育支援の指導教室の支援者サポートとして, 継続的に関わり, 実践的研修を積んだ。 3 教育相談を課題とした校内研修会を実施し, 本学特別支援教育専攻 井上とも子教授の助言を頂いた。 			
評価指標の達成度及び成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 特別支援教育巡回相談員2名が, 県主催の研修会に2回以上参加したり, 支援対象の保育所に1回以上の電話相談と来校相談を4回以上行うことができた。 2 「わくわく教室」のサポーターとして特別支援教育巡回相談員が8回行い, 早期教育支援の実践を積んだ。 3 本校職員対象に相談事例をもとに課題解決策の検討する研修を実施した。校内リソース掲示板については有効な活用ができなかった。 			
総合評価 (記号を○で囲む)	A	(B)	C	D
	80%以上	70~79%	50~69%	49%以下
評価根拠	具体的な評価指標において, 目標とした指標を達成することができたが, 校内リソース掲示板の活用については課題として残った。			
次年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> 1 校外の教育相談活動においては目標を達成できたが, 相談活動に伴う実質的時間の抽出が困難なことが現状である。円滑に教育相談活動を行うための校内体制を整えること。 2 掲示板等を有効に活用し, 専門的知識や実践を校内職員へ還元するとともに活動で得た相談事例による課題解決共有の場を増やすこと。 			

平成28度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	地域支援部			
重点課題	地域のニーズに即した特別支援教育のセンター的役割を果たすため、相談支援に対応できる学部体制の構築を図る。			
重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 校内の職員や外部の専門講師による公開研修を企画し、本校の特別支援教育のセンター的役割を効果的に発揮し、その充実を図る。 2 公開研修会や校内研修会を通して、特別支援教育のセンター的機能に関わる教員の専門性の向上を図る。 			
目標についての具体的な評価指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 校内各学部職員や外部の専門講師による研修会を企画し、本校が積み重ねてきたリソースを発信する場として、地域に公開する。(夏季公開研修会6回)。 2 鴨島病院の専門家(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)と連携した校内研修会を年間3回実施する。 3 研修会後の参加者アンケート実施・集計し、研修成果を検証する。 			
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<ol style="list-style-type: none"> 1 4月に各学部の外部専門家に対するニーズを聞き取り、鴨島病院の専門家による研修会を企画立案する。 2 昨年度のアンケート結果と各学部のニーズの聞き取りから夏季公開研修会の企画立案をする。 3 研修会を運営する。 4 研修会后、参加者を対象にアンケートを実施し、集計する。 5 研修内容や運営の方法と集計結果を考察し、来年度の計画に向けて改善案を作成する。 6 校内リソース掲示板や本校HPに研修内容や実施後の成果を報告し、校内と地域に情報を発信する。 			
実施状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 本校の事例を元にした鴨島病院の理学療法士、作業療法士、言語聴覚士による研修会をそれぞれ1回ずつ、年度の前半に実施した。 2 昨年度のアンケート結果を参考に、ニーズの高かった内容を加味した夏季公開研修会を企画立案し、実施した。 3 夏季公開研修会においては毎回実施後に、鴨島病院の外部専門家による研修会においては年度末にアンケートを実施し、来年度に向けての指針材料とした。 4 校内へはポータルサイトを活用して、校外へは主として電子メール等の活用で各地域へ情報を発信した。アンケート結果は、校内掲示板を通じて職員に還元した。校外へは、年度末または来年度にまとめて掲載することになっている。 			
評価指標の達成度及び成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 夏季公開研修会において、校内職員による研修会を4回、外部の専門家による研修会を2回、計6回実施できた。校内外から延べ約600人の参加者があり、昨年度のアンケート結果を元にした研修内容を地域に発信することができた。 2 外部専門家による研修会の実施により1年間の実践に繋げることができた。 3 夏季公開研修会において毎回80%以上の満足度を得た。アンケート結果より、来年度の計画に向けての具体的内容を検討する指針ができた。 			
総合評価 (記号を○で囲む)	○A	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	評価指標として目標に掲げた研修会を実施し、本校のセンター的することができた。外部専門家との連携において、実践的な教育活動を行うことができた。			
次年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> 1 公開研修会については、さらに充実した実施に向けて、その内容と効率的な実施方法を検討する必要がある。 2 今年度の成果により、今後も継続した連携を検討したい。センター的機能の一つとして、外部相談機能としても活用できるように検討する必要がある。 			

平成28度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	総務部
重点課題	備品台帳を作成し、備品を管理することで、児童生徒の教育の基礎的環境を整備する。
重点目標	総務部員が現在校内にある備品を整理し、台帳に記入・管理することで、授業等での円滑な備品の活用を図り、教育の充実をめざす。

目標についての具体的な評価指標	<p>①備品台帳（換金性の高いデジカメ等を含む）および貸し出し簿を、8月末までに作成する。</p> <p>②8月末までに、その備品が安全に使用できるかどうかを点検し、不具合のある場合は修理等を依頼する。</p> <p>③備品の活用状況について教員にアンケートを年2回実施し、使用頻度が20%以上あることを目指す。</p>
実施計画 (手だて・スケジュール等)	<p>4～8月 各学部にある備品を調べ、備品台帳を作成する。備品で不具合があれば修理の可否を確認する。</p> <p>9月～2月 9月に教員アンケートを行い、備品の活用状況や備品管理に関する要望を把握し、課題を把握するとともに、使用頻度が高まるような手立てを検討する。</p> <p>2月に教員アンケートを行い、年度目標の達成状況を確認する。</p>

実施状況	<p>①備品台帳（換金性の高いデジカメ等）は8月末には作成できなかったが、12月に作成できた。備品台帳は教職員が随時閲覧できるように、校内ポータルサイトでの共有を図った。</p> <p>②備品の点検を12月末までに実施した。</p> <p>③備品の活用状況を把握するために、使用簿を作成・設置した。2月現在備品の利用状況や使用簿の利便性について調査中である。各学部での現時点での聞き取り調査においては、使用簿を作成したことにより、備品使用時における意識が高まったという意見が見られた。</p>			
評価指標の達成度及び成果	<p>①及び②の目標は達成できた。③は備品台帳の作成や備品点検が遅れたため、使用簿の改善や2回のアンケート調査が実施できなかった。来年度も引き続き備品調査や修理を行い、今年度達成できなかった使用簿の改善を行う予定である。今回の取り組みをきっかけに、換金性の高い備品以外の備品整理についても、総務部員自体の意識が向上した。</p>			
総合評価 (記号を○で囲む)	A	(B)	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	<p>目標であった換金性の高い備品台帳を作成し、閲覧できるようにしたことと目標の7割以上は達成できたと考える。</p>			
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に備品整理と修繕を実施して、学習時の即時性を整える。 ・校内教員の備品使用時のニーズを把握し、使用簿の改訂を行う。 			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	総務部（ICT教育）
重点課題	教育相談，ICT教育機器の活用，継続的な相談支援の実践をとoshi，個々の教員の資質の向上を図る。
重点目標	①外部講師やICTサポーターを招き，ICT教育機器の使い方や使用例等を具体的に提供し，教員個々のさらなる習熟や資質の向上を図る。 ②ICT教育機器を準備し，ICTサポーターを活用するシステムを作り，授業においてICT教育機器を使用する場面や回数を増やすことにより，個々の児童生徒への合理的配慮や基礎的環境整備の手助けを行う。

目標についての具体的な評価指標	①iPadなど，ICT教育機器の使い方や使用例を習熟してもらうための研修会を年間で1回以上開き，ICTサポーターを1ヶ月に3回以上招く。（教員の学校評価アンケートにおける満足度80%以上） ②各学部において1週間でのべ3時間以上，ICT教育機器を活用した授業を実施する。（保護者の学校評価アンケートにおける満足度80%以上）
実施計画 (手だて・スケジュール等)	①6月初旬までに「校内全Wi-Fi化」と「NAS（校内LAN上のHDD）の活用」を完了し，授業におけるICT機器が活用できる環境作りを行う。iPad利用記録簿（貸し出し簿）を作成し，活用状況が把握できるシステム作りをする。 8月中に「iPadなど，ICT教育機器を活用した実践例を具体的に考える」研修会を開く。→9月以降，各学部でさらに授業で活用する。 ・研修会時前後に教員にアンケートをし，活用アンケートとして取りまとめる。 ・校内で活用できるように取組方を具体的にワークショップ形式で研修し，専門家のアドバイスを基に各学部で実践した内容を事例として記録し，その後の実践に役立てる。 ②貸し出し簿に簡単な感想を記入してもらい，研修会（後）のアンケート結果と共に考察し，来年2月に活用後の変化としてまとめ，次年度につなげる。 ※その他，必要がある場合は「ICT機器の活用について」のアンケートを実施する。

実施状況	①7～8月中に「校内全Wi-Fi化」と「NAS（校内LAN上のHDD）の活用」を完了し，授業におけるICT機器が活用できる環境作りを行った。 10月に「iPadなど，ICT教育機器を活用した具体的な実践の研修会（高等部の事例発表）」を開催し，四国大学前田准教授を講師とした研修会を実施した。 ②貸し出し簿の様式改訂は実施できなかったが，今年度の取り組みに状況のアンケート及びICT活用実践報告を作成し，来年度の実践に繋げていきたい。 ※年度内の作成・配付を予定している			
評価指標の達成度及び成果	・高等部のICT教育が充実するように，ICT担当教員と学校ICTサポーターの連携を図ることで，年度前半の重点的なサポートが実施できた。 ・各学部における，ICT機器を活用した授業が毎日1時間以上実施でき，保護者の学校評価アンケートにおいて90%以上が肯定的な評価であった。 ※全校で14名の保護者が「わからない」との回答であり，授業参観の指導内容に取り入れたり懇談等で説明したりすることが求められる。			
総合評価 (記号を○で囲む)	A	B	C	D
	80%以上	70～79%	50～69%	49%以下
評価根拠	・毎日各学部において，ICT機器を活用した授業が1時間以上されるようになった。 ・保護者の学校評価アンケートにおいて90%以上の「良い」評価であった。 ・生徒も含めて，iPad，PC等を活用する場面が見られるようになった。			
次年度の課題	今年度で各学部（学校全体）でICT教育を推進する環境が整ったが，今後はさらに校内無線LANの環境が整備されることが予定されている。今後もICT教育を推進・継続するために，ICT教育推進係の配置・活用を進めるとともに，外部の専門家の助言や学校ICTサポーターの活用に取り組んでいきたい。			

平成28年度 附属特別支援学校 学校評価シート

学部・部	支援進路部		
重点課題	知的障害特別支援学校として、個々の児童生徒の合理的な配慮と基礎的環境整備の関連を図る。		
重点目標	1 東日本大震災や熊本地震の事例を活かした最新の安全教育対応を進める。 2 安全教育計画に基づいた実践的な対応を検討、実施する。 3 保護者への情報提供と連携の充実を図る。		
目標についての具体的な評価指標	①最新の防災情報に基づき、本校の実態に即した安全管理計画を作成する。 ②安全管理計画に基づいた実践的な訓練や教員研修を8回/年実施する。 ③大地震対応マニュアル運用を徹底し、緊急連絡網の整備を図る。 ④7月までに災害対策における校内環境整備を図る。		
実施計画 (手だて・スケジュール等)	4月～5月：防災に関する関係機関からの情報収集と平成27年度の反省を基に安全計画の作成。 4月～12月：安全管理計画に基づき、地震・火災・津波・交通災害等に対する訓練を実施することで、一人一人の児童生徒の基礎的環境整備・合理的配慮についての検討。 ・訓練毎に実施状況を紙媒体（および学校HPアップ）にて保護者周知を図ることにより防災教育及び連携体制への意識の高揚を図る ・1回/月教室環境の点検を実施し、必要に応じて対応・修繕を進める。 ・メール配信システムを総務部と協働で整備し、運用を進める。 3月：支援進路教員で保護者評価アンケートを参考に総合的な評価を行う。		
実施状況	・4月～5月関係機関から情報収集を行い6月『消防計画』8月『安全管理計画』を作成した。 ・年間安全教育計画に基づき、地震・火災・地震津波・交通・誘拐に対する訓練を実施した。教職員対象に救急救命法、避難シュートの講習会を実施した。 ・2回/年、安全教育の実施状況を「安全教育便り」として保護者配付して周知を図った。 ・1回/月教室環境の点検を実施した。 ・緊急時メール配信システムを整備し、試行運用を行った。 ・保護者による学校評価アンケートを参考に評価を行った。		
評価指標の達成度及び成果	・最新の防災情報に基づいた、本校の実態に即した『安全管理計画』を作成した。 ・安全教育計画に従って訓練および点検を実施した。 ・保護者への周知および安全意識を高めることができた。		
総合評価 (記号を○で囲む)	(A)	B	C
	80%以上	70～79%	50～69%
評価根拠	・年間計画に沿った安全教育を実施したことによる。 ・保護者による学校評価アンケート結果（学習環境項目 NO13）において肯定的な評価が81%に達した（昨年度比17ポイント向上）ことによる。 ・部員による総合的な評価による。		
次年度の課題	・総務部との協働による緊急時メール配信システムの完全整備と運用。 ・教室環境の点検に伴う、未対応の教室等の整備。		